

丹後由良における廻船業の展開

—新出資料の紹介をかねて—

資料課 稲穂将士

はじめに

本稿では、今年度当館において受け入れをおこない、現在整理中である、『丹後国加佐郡由良村米屋新四郎家文書』（以下『米屋新四郎家文書』）を取り上げ、丹後国加佐郡由良村（現宮津市由良）を拠点に活動した、同家の廻船業の様相について検討する。

由良川を挟んで対面する由良と同郡神崎村（現舞鶴市神崎）は、北前船をはじめとする諸廻船の船頭や水主などの乗組員を輩出した村ということが知られている。特に由良は日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」の構成文化財である、由良金比羅神社や同社に奉納された船絵馬群、廻船の船頭を務めた『加藤家文書』など、廻船に関連する資料が多く残されている⁽¹⁾。

その一方、平成6年から同17年にかけて編さんされた『宮津市史』では、由良に関する記述がほとんどみられない。これは、市史で対象となった地域が宮津藩領内の地域に主眼がおかれたためと考えられる。宮津藩領内の村のほとんどは与謝郡に含まれるが、由良地区は加佐郡に属し、近世を通じて田辺藩領であった⁽²⁾。

本稿では、まずはじめに丹後廻船に関する諸研究や自治体史などの記述について整理をおこなう。あわせて、自治体史編さん以降の調査・研究成果についても触れる。その上で、今年度から整理を始めた『米屋新四郎家文書』の内容にふれ、重要な論点を抽出していきたい。

1. 丹後廻船の研究史

本章では、丹後廻船のこれまでの研究のレビューをおこなう。私見の限り、当該分野のこれまでの研究を収集したが、遺漏があればご寛恕願いたい。丹後廻船に関する研究の嚆矢は、大正年間に刊行された『岩滝村誌』や『与謝郡誌』、『熊野郡誌』などの郷土誌である。例えば、『与謝郡誌』には「与

謝湾交通の沿革」という項があり、「郡の中心たる宮津港は北海唯一の良港なれば旧藩時代にありては(中略)北海道揖行の船舶は尽く輻湊して帆檣林立し(中略)。寛文年中伊根浦に船番所あり、日置・大島・大原等に船役の課役あるを見れば当時これ等の土地が海上交通上相当の地位を保てるを知るべし。」⁽³⁾として、近世における廻船の隆盛について説明している。

戦後になると、足立政男が、近世における領国経済から全国経済への発展と変遷の有様を解明しようとする関心から、日本海海運について分析をおこなっている。足立はこの中で、丹後国竹野郡浅茂川村（現京丹後市網野町）の山中九兵衛家や岩滝の諸商人など、廻船業と地方の商業（主に縮緬業）を兼営する商人を素材に、丹後廻船の全国的な展開の様子を明らかにした。

この足立の研究をふまえ、丹後廻船研究の現状の到達点を示しているのが真下八雄である。真下は、丹後の廻船について以下の4点を指摘している⁽⁵⁾。

- ①船主は、田辺藩・宮津藩城下の町人船主、岩滝・加悦の生糸・縮緬問屋船主(以上商人船主)、神崎・由良・間人をはじめとする浦方の百姓船主の3系統に大別される。
- ②百姓船主が、丹後を根拠地とし、丹波・丹後の産物を日本海沿岸の各地と交易する地方的廻船業者であったのに対し、商人船主は、縮緬業や酒造業などの諸商業によって資本を蓄積し、次第に地方経済から遊離し、大型廻船を多数所有する全国的廻船業者へと成長していった。
- ③廻船の乗組員のうち、水主は特定の沿海村の中⁽⁶⁾・下層農民が中心で、上層農民の中には直船頭⁽⁷⁾が多く見られる。
- ④水主のなかには、永年の航海経験を買われて、沖船頭に抜擢されて資本を蓄積し、そこから独立を果たして、直船頭・船主となるものが登場する。

以上4点の指摘は、近世後期から明治初頭までの丹後廻船の様相を知る上で重要で、今尚色褪せない指摘である。

この真下の研究以降に刊行されるのが、『舞鶴

市史』や『宮津市史』の自治体史である。『舞鶴市史』の水上交通に関する項は真下による執筆で、論旨はそれまでの研究と大きくは変わらない。⁽⁸⁾『宮津市史』では通史編下巻の近代の項で、丹後の廻船業について触れている。『舞鶴市史』の記述に依拠しながらも、昭和63年(1988)に調査が完了した『元結屋三上家文書』(以下『三上家文書』)の調査成果をふまえ、同文書群からは明治27年(1894)を最後に廻船に関する情報がみられなくなることを指摘し、「江戸時代に成立した北前船の伝統は、明治中期に衰退していくまで生きていたのである。」⁽⁹⁾としている。このように『宮津市史』では、明治以降の廻船業について触れているが、本稿冒頭でも指摘したように、近世期の廻船についてはほとんど触れられていない。これは、宮津藩領(特に城下)の廻船業の実務を担ったのが、田辺藩領である由良の船頭たちであり、市史編さん時の調査が宮津藩領内の地域に重点がおかれたことによるためであろう。

『舞鶴市史』・『宮津市史』の刊行はそれぞれ平成5年・16年であるが、丹後廻船に関して新たな知見はほとんど得られず、丹後の廻船研究はしばらく停滞する。⁽¹⁰⁾

この状況下で新たな動向として現れるのが京都府立大学(以下、府立大)による「宮津市北前船関連資料調査研究」である。この研究は宮津市から府立大が受託し、平成25年から27年までの3年間おこなわれ、宮津市や舞鶴市などの丹後地域に所在する資料だけでなく、北前船の寄港地として著名な山形県酒田市での関連資料の調査がおこなわれた。⁽¹¹⁾この研究の成果は、最終年度に刊行された報告書⁽¹²⁾をはじめ、平成27年に丹後郷土資料館で開催した特別展「大海原に夢を求めて—丹後の廻船と北前船—」や、同年京都文化博物館で開催された「日本のふるさと大丹後展」で公開されている。また、この研究を継承しておこなわれた、平成28年度府立大地域貢献型特別研究(ACTR)「丹後の海」の歴史・文化に関する総合的研究」でも、年度末に報告書⁽¹³⁾が刊行され様々な成果が出された。

2冊の報告書で示された論考の内、本稿と深く

関わる論考を紹介しておく。藤本仁文は、これまで詳細な検討がおこなわれていなかった『三上家文書』を用いて、幕末維新期における同家の廻船業を分析した。⁽¹⁴⁾吉野健一は『三上家文書』と由良の『加藤家文書』、鶴岡の『尾関家文書』などを用いて、丹後廻船による遠隔地交易の様子の具体像を示し、いわゆる「北前船」が活動する約半世紀前の延享4年(1747)に、丹後伊根の船が酒田まで到達していたことを指摘した。⁽¹⁵⁾小室智子は、自治体史編さん以降に整理された舞鶴や由良・神崎の廻船関係の古文書を紹介しつつ、丹後廻船の諸相について明らかにし、現状の研究の課題と今後の展望について論じている。⁽¹⁶⁾

小室の論考でも触れられているが、これらの府立大の調査と並行し、また、時には共同して、当館では由良の廻船関係の古文書を受け入れ、調査をおこなってきた。府立大の調査は平成28年度で終了しているが、これ以降も当館では継続して由良の資料調査をおこない、目録を作成している。次章では、今年度当館で受け入れをおこなった『米屋新四郎家文書』の中から、廻船に関する文書を紹介する。

2. 米屋新四郎家の廻船業

『米屋新四郎家文書』は、由良村において廻船の船頭を務めたと伝わる磯田新四郎家に伝来した古文書群で、総数は78点である。最も年紀が古いものが享保2年(1717)の切畑売渡証文で、最も新しいものが昭和8年(1933)の大福帳である。文書のほとんどは、天保期(1830~43)以降の土地の売渡証文であるが、一部廻船に関する資料も数点含まれる。以下、当文書群を用いて、米屋新四郎家の廻船業の様子について検討を加えたい。

『米屋新四郎家文書』の廻船関係資料のなかで最も古いものが、天保3年(1832)閏11月の150石積の弁才船譲渡証文である。本文書からは、羽州庄内加茂(現山形県鶴岡市)の伊藤善左衛門から、米屋新四郎が金72両111文で150石積の弁才船を買い受けていることがわかる。代金の支払いは、この文書が発給された11月9日に約半分の

金36両111文が支払われ、また、「来巳二月中御乗込之節御渡可被成定」とあることから、残額の支払いは翌年2月に新四郎が船に乗り込む際におこなう決まりになっていたようである。

何らかの理由で庄内加茂に行った新四郎が、11月に弁才船を購入し、季節柄航海が難しかったので半額の代金を支払い、一度由良に戻ってから、年明けの春を待って、もう一度加茂を訪れ残金を支払い、船を受け取ったのであろうか。現状では他に関連資料が見いだせないため推論の域を出ないが、当時の廻船の売買の様子がわかる貴重な資料である。

新四郎は、次章で紹介する天保10年「盛岡野辺地湊積雇船下送状之事」という文書から、由良の米屋四郎左衛門の船の沖船頭を務めていたことがわかる。時代は前後するが、四郎左衛門の船に沖船頭として乗り込みながら資本を蓄積していったのであろう。

時代は少し上がるが、天明2年(1782)の田辺城下竹屋町の持ち船が、130~200石積の弁才船4艘、100俵積「とろ舟」2艘、80俵積羽賀瀬船1艘、25俵・30俵積「てんと」をそれぞれ1艘ずつとなっていること⁽¹⁸⁾、明治初期(1870~72)の西神崎村(現舞鶴市神崎)では50石積以上が32艘、200石積以上が3艘所有されていたこと⁽¹⁹⁾、宮津城下の三上家では安政5年(1858)から慶應元年(1865)の間に250~600石積の船を7艘購入していることをふまえると、新四郎が購入した150石積の船は丹後において中規模程度の船であるといえるだろう。

また、『米屋新四郎家文書』のなかには、天保15年(1844)「請状一札之事(船中諸事猥にて規定相究めに付)」(『米屋新四郎家文書』71)という文書があり、そこから由良の廻船の活動の様子が窺い知れるので紹介しておく。この文書は、「船中一統」すなわち廻船の乗組員(水主)たちが「船頭御衆中」にあてた文書の写しで、乗組員などの規律や運賃の増額に関して取り決めたものとなっている。運賃の増額に関しては、「一、越後積石二付六合増／一、庄内積石二付八合増／一、本庄

積石二付壺升増」とあり、積載する荷物一石あたりの距離に応じた増額分を決めている。ここで注目したいのは、天保15年段階で越後国(現新潟県)や庄内(現在の山形県酒田市や鶴岡市など)、本庄(現秋田県由利本荘市)まで由良の廻船が定期的に行っていることが推察される点である。延享7年段階で伊根の船が酒田へ行っていることや、安永6年(1778)に神崎の船が越後国出雲崎に初めて入津したこと、文政10年(1827)段階で「秋田米」「庄内米」「最上米」(以下、これらをあわせて出羽国米)が宮津城下で流通していることはこれまでの研究で知られているところではあるが、これらの資料から由良の船の活動範囲は、天保年間には出羽国本庄まで含まれ、出羽国産の米を運んでいたことがわかる。ただし、現状では他に傍証する資料が発見されていないため、宮津城下に流入した出羽国米が、由良の廻船によって運ばれたものとは断定できないということは申し添えておきたい。

3. 由良の廻船研究の可能性—天保10年「盛岡野辺地湊積雇船下送状之事」から—

最後に『米屋新四郎家文書』の中から、天保10年(1839)の「盛岡野辺地湊積雇船下送状之事」(『米屋新四郎家文書』38)を紹介したい。本文書は盛岡藩の大坂御用銅掛合役人である帷子多八と田談内蔵丞から、同藩の野辺地湊(現青森県野辺地町)の御用銅掛合役人の松井庄作・高田等とその手先奥山弘平、そして京都の新宮涼庭にあてられたものである。複数の論点を含む資料なので、本稿の末尾に翻刻文を全文掲載しているので参照されたい。

本文書は盛岡藩の大坂役人が、同地へ御用銅を廻送するために、米屋新四郎が沖船頭を務める米屋四郎左衛門の500石積弁財船を雇い入れた旨を、野辺地湊の同藩役人へ伝える送り状である。御用銅とは、幕府が長崎から輸出した銅で、大坂で精錬された⁽²²⁾。盛岡藩は正徳5年(1715)に65万斤の御用銅の供出を命じられているので、本文書中の御用銅とはその一部であろう。

本文書の冒頭には、船の規模や積載している道

具類が示される。中間部には、御用銅26,250斤を100斤につき銀8匁5分の運賃で運ぶこと、「日丸船印」を大小2本ずつ渡していることが記される。この「日丸船印」は、寛文13年(1637)以降に幕府領の年貢米(御城米)や御用銅など、幕府の公用荷物を運搬する際に用いられる、日の丸の旗のことを指すと思われる。

続いて運賃の支払いなどに関する但し書きがあるが、そこに「野辺地湊入船先船を段々積立候間、後船之分無異儀相待可申事」、すなわち野辺地湊へ入船した船から次第に荷物を積むようにとあり、新四郎が沖船頭を務める船以外にも複数の船が、この御用銅廻送に雇い入れられたことが推測される。実際にどれだけの御用銅が新四郎の船に積まれたかは定かではない。しかし、宝暦11年(1761)に丹後沖で難船し、伊根浦に避難した大坂道頓堀堺屋利右衛門船は、盛岡藩御用銅140箇と秋田藩御用銅60箇、船頭の買積荷物である米1698俵・大豆242俵・小豆150俵・杉材木400本を積んでいること⁽²⁵⁾や、安政2年(1831)に若狭国三方郡久々子村(現福井県三方郡美浜町)の川渡甚太夫船が、同国本郷(現福井県大飯郡おおい町)で小浜藩の御用銅「五百丸」を、小浜で米150俵を積んでいること⁽²⁶⁾などをふまえると、新四郎の船も他の荷物とあわせて御用銅を積んでいた可能性がある。これまでの研究では丹後廻船は秋田まで進出していたことは知られていたが、本文書から、そのさらに北まで進出していたことが窺える。これも傍証する資料が他に無いため後の発見を俟ちたい。

最後に、本文書の宛所に注目してみたい。盛岡藩の野辺地湊役人2名の他に、「新宮涼庭殿」という名前がみえる。新宮涼庭は由良出身の医者で、長崎に遊学したのち京都で活躍する人物である。涼庭は文人としての側面ももち、丹後を中心に数々の書を残している。そんな医師・文人である涼庭の名が何故この文書で出てくるのであろうか。大正14年(1925)に刊行された『加佐郡誌』にこの問いに答えるような記述があるので引用したい。

「長崎遊学の時藩主牧野侯より修業費若干を受けたる旧恩を想起し、侯に金若干を献じて窮民賑恤の用に供し、更に進んで南侯、越前侯等の財政修理を担当された。南部侯は先生陶朱公の才有り⁽²⁸⁾と聞く⁽²⁹⁾とて礼を厚うして迎へたから、(中略)盛岡に着するや名馬「名鷹」を山野に放ち、無用を省き有益を奨め、財政を釐革し政治を刷新し、藩士の不平反抗を顧みず、撥乱反正的改革を遂げて京に帰り、而も自身壹万兩を侯に貸与せられた、侯も其恩⁽²⁹⁾に感じ禄三百石を賜はつた位である。」

京都で医者として大成した涼庭は、長崎遊学の費用を出してくれた田辺藩をはじめ、諸藩の財政再建を担ったようで、盛岡藩もその一つであったようである。財政再建に自身の考えを反映させるだけでなく、盛岡藩や越前藩には1万兩を貸与したりするなど、大名貸のような活動をしていることがわかる。この『加佐郡誌』の記述は典拠が示されていないため、そのまま鵜呑みにすることは避けたいが、涼庭が盛岡藩と何らかの関係があったことは間違いないだろう。そんな涼庭が、御用銅送り状の末尾の宛所に名前が見えるのは単なる偶然ではなく、『加佐郡誌』にみえるような関係によるものであると考えられ、故郷の由良の廻船と盛岡藩の仲介役を担っていたと推測される。御用銅送り状は、涼庭の京都における活動の様子の一端を窺い知れる一次史料としても貴重といえるだろう。

おわりに

本稿では、『米屋新四郎家』文書を用いて、同家の廻船業の様子について検討を加えた。本稿で明らかにし得たことは、天保年間には由良の船も出羽国方面に進出しており、一部陸奥国野辺地湊など、さらに北へと進出する船もあった可能性があるという点であろう。

新四郎は、天保3年に150石積の弁才船を庄内加茂で購入しているにも関わらず、同10年には米屋四郎左衛門船の沖船頭を務めている。このことは、自身の船を持って直船頭となる人物が、時

には別の船で雇われて沖船頭となるという可能性を示しており、船頭稼業の多様なあり方を知る上でも興味深い。また、『米屋新四郎家文書』では、天保年間を境に土地の譲渡・売渡証文が増えている。ここから、この頃に廻船業で資本を蓄積した新四郎が、地元での土地所有を拡大していった様子も窺い知れ、廻船業を務めた家の経営の様子を知る上でも本文書群は重要であるといえるだろう。

本稿執筆中にも由良では新たな古文書群が発見された。近々調査を開始する予定であるが、この文書群から更に新たなことがわかるかもしれないし、本稿で示した内容を傍証してくれる資料が新たに見つかるかもしれない。今後の新たな発見に期待しつつ、ひとまず擱筆することとする。

【付記】

本稿の執筆にあたり、小室智子氏・加藤正一氏・飯澤登志朗氏からご助言をいただき、多くの示唆を得た。特に小室・加藤両氏には当館での由良の古文書整理に関して永年にわたり多大にご尽力いただいている。記して感謝申し上げたい。

注

- (1) 「日本遺産ポータルサイト 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」
<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story039/>
(2020年2月19日最終閲覧)。
- (2) 柴田實・高取正男編『京都府の地名』、平凡社、755頁。
- (3) 与謝郡役所編1972『与謝郡誌』上巻、名著出版(初出は1923年)。
- (4) 足立政男1957「近世における日本海沿岸の帆船航運の状況について—丹後国網野縮緬機業地帯における山中九兵衛家の文書を中心として—」、『立命館経済学』6—2。
- (5) 真下八雄1967「幕末・明治前期における丹後海運業について」(福井県立図書館・福井県郷土誌懇談会編『日本海海運史の研究』、福井県郷土誌懇談会、所収)、同1987「丹後の廻船業」(中嶋利雄・原田久美子編『日本民衆の歴史 地域編10 丹後に生きる—京都の人びと』、三省堂、所収)。

- (6) 船頭以外の一般乗組員。職務によって親仁・表・片表・若衆・知工・炊などに分けられる(前掲真下1987、57頁)。
- (7) 船頭は直船頭と沖船頭に大きく分けられる。船主が実際に船に乗り込んで船頭を務めるものを直船頭、船主とは別に船頭を雇う場合を沖船頭という(柚木学1979『近世海運史の研究』、法政大学出版会、220頁)。
- (8) 舞鶴市史編さん委員会編1993『舞鶴市史』通史編(上)、1038～1065頁。
- (9) 宮津市史編さん委員会編2004『宮津市史』通史編下巻、宮津市役所、593頁。
- (10) 平成6年に『岩滝町誌』が刊行され、岩滝の廻船船主に関する指摘があるが、真下の諸研究に依拠した内容となっている(岩滝町誌編さん委員会編1994『岩滝町誌』、岩滝町、467～475頁)。
- (11) 藤本仁文2016「宮津市北前船関連資料調査研究」の概要」(同編『宮津市北前船関連資料調査研究報告書』、京都府立大学文学部歴史学科日本近世史研究室、1～5頁)。
- (12) 前掲『宮津市北前船関連資料調査研究報告書』。
- (13) 藤本仁文編2017『京都府立大学文化遺産叢書第12集「丹後の海」の歴史と文化』、京都府立大学文学部歴史学科。
- (14) 藤本仁文2017「幕末維新期宮津三上家の廻船業」(『「丹後の海」の歴史と文化』所収)。
- (15) 吉野健一2016「江戸時代における丹後からの輸出品・輸入品について」(『宮津市北前船関連資料調査研究報告書』所収)。後に、伊根浦や越後国出雲崎(現新潟県出雲崎町)の資料も用いての論考が発表されているので、あわせて参照願いたい(吉野2019「丹後における遠距離廻船の嚆矢について」(『舞鶴地方史研究』50、所収)。
- (16) 小室智子2017「舞鶴湾から若狭湾・日本海へ—幕末・明治期の廻船関連文書—」(『「丹後の海」の歴史と文化』所収)。
- (17) 「譲渡申一札之事(弁才船150石積1艘)」(「米屋新四郎家文書」67(京都府立丹後郷土資料館保管))。なお、弁才船(弁財船)とは、16世紀ごろに瀬戸内海を中心に発達した、一本水押と大きな帆をもつのが特徴の船で、江戸時代中期以降大型化して1000石積級も登場し、近世日本の廻船の主役となる船種である(石井謙治1995b『和船Ⅱ』、法政大学出版局、152～159頁)。
- (18) 前掲真下1967、934頁。
- (19) 前掲真下1987、62頁。
- (20) 前掲藤本2017、74・75頁。
- (21) 前掲註15。
- (22) 国史大辞典編集委員会編1989『国史大辞典』第10巻、572頁。

- (23) 渡部紘一1986「近世米代川舟運と南部領銅の廻銅―尾去沢銅の米代川川下げと能代沖出しを中心―」、『秋田県立博物館研究報告』11、30頁。
- (24) 前掲石井1995b、275・276頁。
- (25) 「浦手形之事(難船に付)」(『岩崎英精氏収集文書』88、京都府立丹後郷土資料館蔵)。
- (26) 「御用銅御米大坂積廻シ海上日記覚」(師岡佑行

- 編注・師岡笑子訳『川渡甚太夫一代記―北前船頭の幕末自叙伝』、平凡社、358頁)。
- (27) 『舞鶴市史』通史編(上)、1038頁。
- (28) 京都府立丹後郷土資料館編1995『特別陳列図録37 新宮涼庭と丹後の医の流れ』、1頁。
- (29) 京都府教育会加佐郡部会編1972『加佐郡誌』、名著出版、202頁(初出は1925)。

「盛岡野辺地湊積雇船下送状之事」(『米屋新四郎家文書』三八)

盛岡野辺地湊積雇船下送状之事

一 弁財船五百石積 壹艘

丹後由良米屋四郎左衛門船
沖船頭新四郎
水主共廿九人乗

一 楫 壹羽 一 櫓 杉

一 桁 杉 一加賀芋綱 三房

一 市 波(マ・皮)綱 三房 檜綱 三房

一 鉄碇 七頭 一段シ、壹番百貫目

一 橋船 壹艘 一段シ、船道具代銀二付
大坂表改之取置

〆 栄 駒之頭・楯・櫓・桁
此極印相用

積荷物

一 御用銅貳万六千貳百五拾斤

但シ、壹箇七拾斤入
運賃銀百斤二付
銀八匁五分宛定

一 日丸船印大小貳本相渡之

但シ船下着六十日限、若荷物出合

無之時者下着廿日之間相待

可申定、登海上之儀者先年

被 仰出通可為御法荷物大坂

着水揚相濟候上、運賃銀相渡

可申定、尤野辺地湊入船先船方

段々積立候間、後船之分無異儀

相待可申事

右之通船并諸道具致吟味、駒之頭江
拙者共印形相記此度雇下申候、於
其地御改前中相違無御座候、登荷

物御積渡出帆可被 仰付候、依而雇船送り
状如件

南部信濃守内於大坂御用銅掛合

天保十亥二月十三日 雌(マ・雄)子多八

田談内蔵丞

南部信濃守内野辺地湊二而御用銅掛合

松井庄作殿

高田等殿 手先奥山弘平殿

京都新宮涼庭殿

令和元年度のあゆみ

- 4.2 常設展「海国・丹後を巡る-丹後の歴史と文化-」
(～3/31)
- 4.2 コーナー展示「明智光秀・細川ガラシャ・細川幽斎・細川忠興ゆかりの地」 (～3/31)
- 4.20 企画展「籠神社の至宝と丹後府中」 (～6/9)
- 4.27 ぶらり丹後「本坂道」
- 5.25 文化財講座①
「籠神社の獅子狛犬と神面」
講師：和歌山県立博物館館長 伊東史朗氏
- 6.1 古文書講習会〔午前:実践編、午後:入門編〕
(6/29、7/27、8/31、9/28、10/26、11/30)
- 6.8 文化を未来に伝える次世代育み事業「日本画を描いてみよう」
講師：株式会社 修美 田畔徳一氏
- 7.2 特別陳列 整理終了記念「安久家文書の世界」
(～8/4)
- 7.20 こども体験教室
勾玉(7/20、7/25)、銭(8/2、8/10)
鏡(8/17、8/22)
- 8.10 「日本画を描いてみよう」作品展
「複製成相寺参詣曼荼羅」完成披露展示
(～8/25)
- 8.24 こども体験教室「そばを作ろう」
(11/2、11/16、12/15)
- 8.31 ICOM京都大会開催記念特別陳列
「湯舟坂2号墳出土環頭大刀」
「大田南5号墳出土青龍3年銘鏡」 (～9/16)
- 9.4 巡回展「発掘された京都の歴史2019」
(～9/16)
- 9.7 文化財講座②
「発掘された京都の歴史2019」
講師：(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター職員 松尾史子氏
- 9.28 企画展「光秀と幽斎～丹波・丹後の攻防と支配～」
(～11/17)
- 10.5 ぶらり丹後「弓木城」
- 10.5 巡回展「安久家文書の世界」
会場：舞鶴赤れんがパーク (～10/27)
- 10.19 文化財講座③
「現地講座・福知山城を歩く」
講師：当館 資料課長 森島康雄
- 11.2 ぶらり丹後「宮津城」
- 11.9 文化財講座④
「光秀・幽斎と丹後一色氏」
講師：大山崎町歴史資料館館長 福島克彦氏
- 11.30 特別展「蚕業遺産×ミュージアム-蚕都がつむいだ文化財の新たな価値と可能性-」
(～1/19)
- 11.30 第30回紙すき教室
(12/1、12/7、12/8、1/25、2/1、2/4)
- 12.14 フォーラム「プレハブの中の文化財-蚕都の遺産を活用するためのA to Z-」
会場：あやべ・日東精工アリーナ
講演：『「地域教育遺産」なるもの～養蚕・製糸、井堰水路や京街道を歩く～』
講師：三和学園 福知山市立三和小・中学校 地域連携コーディネーター 吉田武彦氏
講演：『「蚕業遺産A to Z」が教えてくれるもの』
講師：半農半X研究所代表 福知山公立大学 特任准教授 塩見直紀氏
パネルディスカッション
パネリスト：塩見直紀氏、吉田武彦氏、京都府蚕糸同友会 荒堀満氏
コーディネーター：当館 副主査 青江智洋
- 12.21 ワークショップ「親子で作ろう！まゆクラフト-カイコの天敵だけど来年の干支なのでネズミを作っちゃおう！-」
講師：あやべまゆクラフト工房
- 1.18 ワークショップ「まゆから糸をひこう！真綿を作ろう！」
講師：亀岡市文化資料館友の会 カイコ・綿サークル
- 2.15 企画展「ふるさとミュージアムコレクション」
(～4/5)

丹後郷土資料館調査だより 第9号

発行 2020年(令和2年)3月27日

編集 京都府立丹後郷土資料館

〒629-2234 京都府宮津市字国分小字天王山611-1

TEL(0772)27-0230 FAX(0772)27-0020
